

「自分事」として考えるには？

先月、豊寒別の「ぶんちゃんの里」で1年生を対象とした酪農業に関する探究学習を実施し、私も体験活動に参加してきました。本校のホームページで紹介していますので、是非ご覧ください。

酪農業が地域の基幹産業であることを知っていても、牛乳や乳製品、食肉を供給するために携わる方たちがどれだけ多くのことを行っているのかまでを理解している生徒は少ないため、体験をとおして学ぶ貴重な機会となりました。ご協力くださいました浜頓別町農業委員会の小川会長に改めてお礼申し上げます。

今回の体験学習から感じたこと、印象に残ったことを二つ書きたいと思います。

一つには、体験をとおして学びの意義は深まるということ。

体験に先立って、「焼き肉や牛乳はどこからやってくるか？」というテーマで食と命の関係を考える、紙芝居による学習がありました。手塩にかけて育てた牛を生活のために売りに出さなければならない辛さから、仕事を続けることをためらう父親と、父の仕事の大切さを理解していく子供の話に、恥ずかしながら私は涙してしまいました。

生きていくために他の動物の命をもらうことを学ぶ授業はこれまでも多くあり、映画『ブタがいた教室』では、豚を育てて食べるという学習の最後で、愛着がわいた子供たちが「食べる」「食べない」で話し合う様子が紹介されています。食肉の処理までさせるのは子供たちがかわいそうだという意見も多くあります。しかし、「生きる」という生物として最も基本となる営みですら、現代では当たり前になりすぎていて、私たちが当事者意識を持つことは難しくなっています。

紙芝居の後の「肉を食べるときに最もしてはいけないのは、肉を腐らせたり焦がしたりして捨ててしまうことだ」という小川さんの言葉には、夫婦で牛を育て「命」を出荷してきた当事者としての重みがあります。単に「食べ物を大切にしよう」と教えられるよりも、搾乳や子牛の哺乳をとおして、命の恵みを実感できることが、地域の学校としての浜高の学びだと感じました。

二つには、地域の維持・発展を考えるには、広い視野が必要だということ。

天塩町の副町長を経て現在余市町長を務める齊藤啓輔さんは、紋別市渚滑の出身で「田舎が嫌で仕方がなかった」「中学校を卒業して地元を出たとき、二度と戻るまい」と考えていたそうです。その後の外務省勤務で頻繁に北海道に出張するようになって、「小さい頃に見えなかった風景や資源が、大人になって初めて見えて」、「自分で北海道に行き、モデルケースを立ち上げよう」と地方創生人材支援制度を利用して天塩町に赴任したそうです。地元を離れるときや、今戻ってきてみての思いは私にも共通するものがあり、今、この歳になってわかる、と感じます。

「ぶんちゃんの里」のような地域の資源があまりにも身近すぎて、その価値に気づいていないのではないか。離れてみてわかる町の良さや資源、いわゆる「よそ者」ならでは視点を持たせるために、地元に残る人を育てることと併せて、町を離れて広く学んでみる、そこで学んだことを地元に戻元する人を育てることが必要だと改めて実感しました。

地元から、そして地元以外からもこの地域を支える人を育てるために、学びを深める探究活動を実践していきますので、引き続き皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

令和4年(2022年)9月 浜高だより第158号 校長 三井智和

